

甲陽だより

発行所
西宮市甲子園高瀬町
3番7号
甲陽学院同窓会
電話西宮(0798)06623番
編集責任者 北村善一
印刷所
株式会社 小西印刷所
西宮市御茶家所町5-13
電話西宮0691代

五十周年を前にして

同窓会会長 宮崎武男

母校甲陽が来年は創立五十周年を迎えるという。指折り数えると正しくそうである。会員諸君にはそれぞれ各種各様の感慨があろうが、第一回の卒業生としてはまた懐かしさが一入である。何しろ阪神沿線には中学は甲陽ただ一つという時代である。西宮もまだ市になつていなかったし、第一今津は西宮ではなかった。その今津町の町はずれの枝川の畔の松の緑も艶やかな一角にそれが現在の高等学校の位置なのだ。私立甲陽中学が誕生したのは大正六年二月のころであった。

しかし流れには、結が水底に黒い影を落しながら泳いでいた。昼食は雨降り以外は校外で食べるきまりであった。春秋の好季節は毎日遠足をしているような気分、殆んど人通りもない堤や川原を甲陽健児は我が物顔に遊んでいた。校長は伊賀駒吉郎先生であった。御影師範の主事や府立夕陽ヶ丘高女の創設校長を継られた先生で、補欠に授業にいられた時などギリシャの逍遙学派だなどと言って校外で教えられたこともあったのを思い出す。まことに私塾といったような学校であった。

大正九年三月には辰馬吉左衛門翁の篤志によって、財団法人辰馬学院甲陽中学校となり我々は全部編入試験を受けて正式に中学校の生徒となった。爾来財的基礎は確立して、年を逐うて大いに発展したことは先刻ご承知のところであらう。

およそ物の成るは一日にして成るに非ず。まことに甲陽こそは、天の時、地の利、人の和を得て洋々たる前途を持つてゐる学校というべきである。即ち現在の設立者辰馬吉男氏は先代の遺業を継承し日夜努力されている。

同窓会総会御案内

一、日時 八月二十八日(日) 午後三時

一、場所 母校講堂

一、会費 二百円

但し、学生会員は百円

特別会員及新卒会員は招待

お誘いあわせの上、多数御来会下さい。

昭和四十一年八月

甲陽学院同窓会

魂の故郷なる母校五十年の巨大な足跡を一覽して知るための碑を校門附近に立てること。同時に同窓会の健全なる発達を庶幾するものとして同窓会基金もこの際は非とも残して置きたい。右の計画にご賛同を得て五十年を記念したい。七千の同窓会の物心ともに熱烈なご支援を得ることと確信し、ひたすら懇願する次第である。

会員の御活躍

諸戸素純氏 四回卒の氏は四月より大阪市立大学文学部長に就任された。

豊原大潤氏 五回卒の氏は本願寺派総長に就任された。ご承知でもあらうが、総長は本願寺派の総理ともいふべき位である。

川勝賢作氏 十回卒の氏は大阪大学附属歯科病院の院長に再選された。

高瀬信二氏 十二回卒の氏は過般西脇市長に当選された。会員中最初の市長である。

花房秀三郎氏(昭和二十三年卒) ガン細胞生成に関する生化学的研究で画期的な行績を挙げらる。

酒井一氏(昭和二十五年卒) 岩波講座「日本歴史」に執筆、県史編纂委員として活躍。

下西康嗣氏(昭和三十五年卒) 阪大理学部博士コース終了後、ドイツ留学中氏は下西先生のご令嗣である。

友国説郎氏 本学院同窓会副会長(第八回卒業生)である友国説郎氏——明和病院院長——は、全日本病院協会から派遣されて、昭和四十一年六月八日から他の七名の会員と共に、約一ヶ月半にわたり、イギリス、フランス、ドイツ、ソ連等ヨーロッパ十四ヶ国及アメリカを医学研究ならびに各地病院を視察され過般、七月二十三日帰国された。

有沢良一氏 本学院同窓会声屋支部長(第五回卒業生)である有沢良一氏——有沢眼科——は、ライオンズ・クラブの前声屋支部長であり、かつ兵庫県PR委員をされておられるが、過般七月七日より十八日にかけて東南アジア各地を訪問され、各国ライオンズ・クラブとの交歓に努め成果を挙げてこられた。

退職のことば

三 谷 正

わたしが甲陽に赴任したのは昭和六年四月の春でありました。その頃、校門附近、運動場南側の塀沿い、玄關前南北の庭園、職員室の南側には、桜の花が満開でありました。そして五、六月の候ともなれば、校門から玄關に続く藤棚には紫と白の花が房々とさがり、文字通りの花園の学園でありました。

この花園に、新築されて間もない爽やかな校舎が聳え、ここに出入するのが、清潔な感じのするグリーンがかったカーキ色の制服と、すっきりした六稜の校章をつけた制帽の生徒諸君の爽やかな姿であったことは、とても印象的でありました。米国の詩人ロンゲフェローの「小児の新鮮その儘の創造」の感を深くしたのであります。この新鮮味溢れる学園に魅せられて、いつとはなしに、三十五年の歳月を過してしまいました。

思えば二十七才から厄介になり、人生の最もよきときを甲陽に過したことになります。校長に仕えること、初代伊賀先生から教えて六人。その間、赴任後数年ならずして英語主任、管理主任を命ぜられ、後、教頭の重職に任せられながら、何ほどのこともなし得ず在任三十五年の歳月を重ねてしまったことは、身の不徳の致すところとは言え、慚愧の念に堪えないものがあります。

省みますと、比較的楽しかった戦前に比し、戦後の私学経営のむつかしさは、惘然たる思いがします。われながら、よくぞやって来たものとの感を深くします。しかしこれは歴代の校長、諸先生、並びに各回卒業生の同意



生諸君の援助があったればこそと、今更ながら深く感謝する次第であります。殊に同窓生諸君によって、子の親に対するものにも劣らぬ師弟の深い情愛に結ばれ、「よくぞ甲陽に教鞭を執りしものかな」の感を深くするのであります。直接担任するせぬにかかわらず、わたくしに事あれば必ずお訪ね下され、或は春秋の好季節のそれぞれのクラス会に招待を受け、多くの場合、日時の重なりから、その出欠に就て、有難い悩みを持つなど、その他種々のこと、感謝の涙なくしては回想され得ない師弟愛でありました。

こんなわけで、甲陽でのわたくしの生活は幸福そのものであります。しかしこの幸福に、いつまでも浸ることは許されません。わたくしも六十二才になりました。わたしの人生の蠟燭は燃え終りに近づきました。これが全部燃え切るまで甲陽の厄介になることは、最後に於て御迷惑をかけることになりかねないと思えます。それで早い目に退職させて戴いたわけでありました。甲陽も兵庫県の甲陽から天下の甲陽となりました。この天下の名門甲陽に永年勤務した誇りを高く掲げ、且つ深く感謝する次第であります。

三谷 正 略歴

明治三十六年明石市に生れる。兵庫県立姫路中学校を経て大阪外国語学校英語部を卒業。大阪府立北野中学校に勤務する。三年後、更に進んで昭和三年四月九州帝国大学法文学部に学び、英文学を専攻する。同大学卒業後、昭和六年四月甲陽学院に就職し、昭和四十二年三月同学院を退職する。甲陽在職の約十年武庫川女子大学に於て英語学、英文学を講ずる昭和四十一年四月より大手前女子大学勤務。英文学、文学論を講じている。

住所 大阪府羽曳野市羽曳丘の10の16

会員消息

参甲会の集い報告

八月六日の夕べ、西宮市夙川公民館の二階和室で、第三回卒業生の集いが開かれた。司会の妻鹿氏の挨拶で六時半開会。つづいて数十年前の再会という人もあるので順に自己紹介、その後名簿の訂正、不在者の消息の交換等があった。三回生といえは野球の全国制覇の時で、優勝前後のあれこれ、生徒自治会設置の苦心談、枝川畔から甲子園派に及ぶ学生生活の思出、又旧師の思出や現在の甲陽への批判や感想など話題は尽きなかった。

当夜の集いは、一つは名簿の修正依頼の為わざわざ招集して頂いたもので、中島と私の二人が陪席させて頂いたが、名簿も既に印刷されたものが準備せられており、御協力の程衷心御礼申し上げますと共に、忠言長言を織りませて母校や後輩に示された関心と愛情に対しても深い謝意を表したい。八時半、名残なきぬ中に散会したが、終始御世話係として御尽力下さった妻鹿、伴井、後藤の諸氏に特に御礼申し上げます。(柳原記)

(出席者) 吉田寛、伴井嘉三、井上七十郎、徳田信次郎、河田保雄、妻鹿圭男、後藤鏡馬、小前清、西島芳之助、村上吉胤、増谷道夫、喜多村栄三、加藤徳一、頭谷武雄、突田恒宣、山本英之助 (以上)

ミササ会 七回生のつどい

剣道部の中島清之助君のご尽力で、七回生のつどいが、毎年二回持たれている。今までの会場は神戸三宮の金竜閣であった。会名はわれわれの卒業式が昭和三年三月三

日であったというので中村壮二君の提案になるものである。

(本年度出席者) 川合秀雄、古塚毅、河合文男、中島清之助、山辺正、戸井栄太郎、中村壮二、平野宇一郎、津田一太郎、橋本勝弥、金沢幸雄、河東利男、秋本清英、平林格、熊倉健二、安部輝雄の諸君。

哀 悼

本校で退職後永く大阪市立大学で英文学を講ぜられた益田道三先生は昭和四十年十月十三日死去された。市立大学に学んだ会員は、若い方もよくご存知の篤学、温厚な先生で市大甲陽会にもよくご出席下さった先生である。ここに衷心より哀悼の意を表する次第である。

古い卒業生は創立当時在職された那波辻男先生と言え、あのお話の上手な歴史の先生と思ひ出すだろう。

戦後永く樟蔭女子高校に勤務され、総会にも度々ご出席下さった先生一昨年秋死去された。ここに衷心より哀悼の意を表する次第である。

稲田 元 則 氏

昭和三十三年本学院卒。日本大学工学部(建築学科)卒業後、「大成建設」に入社、関東方面に勤務中のところ、昭和四十一年七月九日(土)午前〇時一五分頃、横浜市神奈川区小安に於て自動車事故のため死去。本学院在学中はサッカー部主力選手として活躍。謹しんで同君の冥福を祈ります。

五十周年を迎えるにあたって

二十二回 昭18年卒 中島 久

甲陽の学校が第一回の卒業生を世に送り出したのが大正十一年ということですから、そのときの方々は現在ではもう六十二、三才になられるはずで、戦後学制改革によって新制高校が充足して、その第一回の卒業生を世に問うたのが昭和二十四年。ですからその人々もいまでは三十才をいくつか越しておられます。来年、昭和四十二年には、五十周年を母校、甲陽は迎えようとしていますが、その間、卒業生総数は、実に七千余人を数えるに至りました。

かえりみますと、甲陽が成長してきた半世紀は、いつの時代をとっても文字通り動乱の時代でありました。そのときの一時期、即ち多感多情な青少年期を私達は甲子園原頭において教育を受けてきたのですが、その内容が激動の時流を乗りきるとき、よく卒業生の心の支えとなってきたかどうか。そしてまたそのときに共に学んだ旧師、あるいは級友との交流が年経たいまも懐かしく、あたたかく、時に力強くも励ましとなり母校に対して限りなき誇りと感謝との念に満ちてきたであろうか、どうか、ということなどを折にふれたいおこします。

私は昭和十八年に甲陽を卒業し、昭和二十七年に母校へ帰り、在職すること十四年に及びますが、半世紀の歴史を誇る甲陽の教育とは何であったかということについての日か省察してみたいと考えています。

同窓諸兄も御存知の如く、現在ほど学校教育の在り方について議論の喧しい時代は過去

にその例をみないほどです。それだけに名門、甲陽の在り方について内省することは決して無意義ではないと思います。如何なる企業体であっても安易な経営と労働とが寸毫も許されないのと同様、学校もその例外ではなく、寧ろその評価が後世にゆだねられるだけに、ある意味では利潤追究の企業体より一層厳しいものがあるといわなければなりません。とくに私学の経営は想像以上に困難でありますものを辰馬財団の堅実無比なる経営方針によって動乱の戦後二十年間、着実な発展がなし遂げられてきたことについては、改めて財団に対して敬意の念を捧げなければならぬと感じています。

しかし世の識者が私学を論じますとき、その殆んどの人々が経済的基礎の劣弱さからよってきたる経営論に終始していることは問題であると私は考えています。今後は寧ろ私学教育の根本理念、その精神に基づいての教育内容から論ぜられなければならないのではないのでしょうか。この際わかりきったことですが甲陽は国公立でない「一建立」による私学であるということです。ですから当然私立甲陽の特色、特自性の積極的な展開がなされなければならぬでしょうし、そのためには過去五十年の間に育成された同窓七千有余人によって築かれた伝統を改めて再認識すると共に、清新鋭利たるスタートをきることによ

り、母校の絶大なる発展を期したいものと考

えている次第です。
〔筆者は本学院社会科担当〕

会員だより

同窓の諸賢へ

昭16年卒 佐野 定 敏

甲子園球場の隣、枝川の松に聳える校舎、これこそ懐しい母校甲陽中学である。希望にみちて入学したのも三十年の昔となった。私は昭和二十年に大阪高等医専を卒業後、昭和二十一年五月より国鉄に勤めて二十年間、国鉄の職員診療にとりくんでいる。その間も母校を忘れることは出来ず、暇があれば年に数回母校へ足を運んでいる。

僕等のクラスは総会にも出席する者は僕一人であるし、淋しいことである。それでも母校への愛校心を忘れてはいけないと思ひ、在学時代に居られた先生にお会いするのを楽しみにしている。しかし、松宮先生の死亡、永井先生の御退職、今回、三谷先生の御退職があった。現在では北村先生と浅野先生のお二人となった。それでも嬉しいことは、同窓生の宮本、柳原、中島、吉井の諸先生がおられることである。

近年、母校の大学への入学率の優秀なことは嬉しいことである。枝川の松も昔と趣を変え、第二阪神国道が出来、大分風景は変わった。しかし、伝統ある母校は来年五十周年を迎えんとしている。母校が今後しっかり名声をたかめてほしいものである。そして卒業生がもっと母校を忘れず愛校心を発揮してほしいものである。北村大先輩を中心に同窓の先生達としっかり団結して、母校のためにつくそう。母校よ益々発展せよ!!

エポック

昭30年卒 藤井 保 男

クラス会が途絶えがちになってしまったこの頃、本箱の隅からアルバムを引張り出し、10年前の師の姿、共に学び、遊んだ友の姿に

新たな感動を懐しむ。

来年は創立50周年ともなれば年一回の総会に集い、クラス会に昔をしのぶだけでなく、甲陽の持つ数千人の歴史を結果して同窓会館の如きものなどをつくり、未来の甲陽へのエポックとする潮時ではないのだろうかと考えながら、アルバムを閉じた。

同窓諸氏へ

昭36年卒 花 木 繁

小生が、甲陽を卒業し、五年を過ぎたが、同窓会総会の内容も、マンネリ化し、又、毎年出席する者の顔も、卒業後三年もすると、決まってしまった様で楽しみが減じている。

来年創立五十周年を迎えようとする。甲陽の同窓会が、こんな状態で良いであろうか。良いとする者はないと思う。そこで、諸氏に望む、来年ではなく、今年から、総会にも、大勢出席し、同窓会の意気を盛り上げようでありませぬか!!

随想

昭38年卒 上田 忠 男

ぼくたち卒業生が二、三人集まれば、最後はいつも母校の話題に終始する昨今であるが、他校特に公立高出身の者にはよく甲陽の人は皆んな個性があつて人間的に面白いと羨やましがる。確かに小集団だったし、共に生活した時間も長かったので、相手を知り、啓発される面も多かったに違いない。

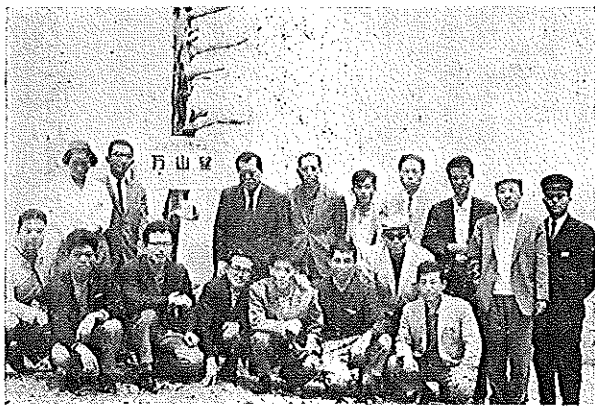
更に甲陽独特の卒業後の縦のつながり、横の結びつきの強さ等も他校に見られぬ美点だろう。夙川堤の紅顔の中学生、甲子園の高校生を見ても、在校中に思う存分、個性の発見、人間的な心の結びつきを強めて貰いたいと願うのみである。いつの日にか各人同じ立場に立つであらうし、卒業生にとっては、母校はいつ迄も心のふるさとであり、いつ迄も旧知の懐しさを胸襟を開けるのは母校の人々であるに違いないと信じるからである。

同窓会紹介

西宮市役所の「甲陽会」

西宮市役所に、戦前すでに甲陽中学校卒業吏員による同窓会があったことは、当時から勤務されている先輩諸兄からきかされていまいが、記録がありませんので詳しく紹介出来ないのは残念です。戦後では、大阪に出て観劇し、夕食を共にし、又市内グレルの座敷で一献くみ交わしたなどのことがありました。昭和三十三年十月二十五日、労働会館に恩師長滝俊市先生を迎えて同窓約十五人が集まったのが、今日記録にのこる「甲陽会」の発会であります。

その後、誰いうとなく今度は親睦をかねた旅行をしてみようということになって、昭和三十四年一月二十四日(土)、はじめて一泊二日で東海道は蒲郡、西浦温泉へと出掛けました。



この第一回の旅行が余程よかったのか、それから旅行会の形態となつては毎年一回の割合で、皆生温泉(二日目は吹雪でした)、観山寺温泉(帰途大雨にありました)、天の橋立(丹後地方は近來まれな豪雪でした)、更には和倉温泉、西宮からマイクローバスを借切つての湯原温泉と蒸山高原ドライブへとつづき、そして今年のみずから信濃路から志賀高原・上信スカイラインの白樺、唐松コースを心ゆくまで楽しんでまいりました。

このように母校甲陽中、甲陽高を卒えて、郷土西宮の地方行政に職を奉ずる同窓は現在二十四名、卒業年次に従つてその殆んどは管理職、そうしてその結びつきはこの会を通してますますなごやかに、ますます強くなつていっています。

当初から会長をおかず、会則もなく、はじめは河合氏、現在は蔵野氏の名幹事のお世話により、極めてむつまじく、極めて民主的に運営されております。

なおこのたび母校創立五十周年に際しての名簿作成には、学校から市議北本正氏(第二十回卒業)を通じて依頼がありましたので、出来得る限り会として、個人として協力することもなりました。

では最後に本会員を紹介させて頂きます。

- 好井 武雄 (S3) 井田 千治 (S19)
- 安部 武男 (S6) 植田 悟郎 (S20)
- 野田徳太郎 (S6) 藤田 義次 (S22)
- 矢野 英雄 (S7) 原毅健太郎 (S22)
- 山上 史郎 (S7) 蔵野 和男 (S25)
- 三竿夷七郎 (S9) 中務 隆 (S26)
- 郷田 正一 (S9) 河合 仁 (S26)
- 宮地 潔 (S14) 山部 理彦 (S26)
- 今井 章 (S14) 堀越 昭一 (S29)
- 喜多 敏夫 (S17) 井口 秀和 (S33)
- 長村 卓 (S17) 政田 路一 (S24中)
- 小池 義一 (S18) 松本 吉雄 (S30中)

阪神百貨店甲陽会

六月二十七日(月)午後六時半より梅田新道の「和楽」で阪神百貨店甲陽会が開催された。この会は各職場での甲陽卒業生が集つて相互融和と親睦を計るもので、当日も日頃のウサを忘れて和気あいあいの内に話がはずんだ。



出席者は清水三郎氏(阪神百貨店渉外部長・十二回卒業生)を中心に当会の世話役佐藤裕氏(二十回卒業生)を始め松岡健吉(二十回卒業)奥村彰(二十二回卒業)中島康雄(二十四回卒業)土谷竜一(二十六回卒業)角野敏二(三十年卒業)逸見真二(三十二年卒業)岩藤信行(三十三年卒業)宮崎清志(三十六年卒業)の各氏であり、殆んどのが父親が阪神に勤めていた関係で、いわば親子二代にわたつて阪神に勤めた「二世組」である。したがって皆んな気心の知れた間柄であるとのこと。

八中島記

山 麓 会

甲陽の教官・OB・生徒をメンバーとして古美術を探訪するグループである。

会の発端は、昭和二十七年九月、現理事山口格太郎先生が中学に社会科担任として着任されたときに始まる。土曜日の午後、あるいは休日に、先生に率いられ、幾人かの生徒が大和路を歩いた。先生が高校に移られ、またメンバーに異動はあつても、この古き美しきものへの探索は続けられた。中学の社会部、高校の地歴部あるいは写真部の中からこのグループに参加する者が多くなつた。

土曜日の午後、授業がすむと直ちに集まつて、残る半日を東大寺に、あるいは葉師寺・唐招提寺に急いだ。遠足などでは味わぬ落ち着いた気分浸つて、建物を、仏像を觀賞した。日曜には少し速出も。京都・奈良はいうまでもなく、近江・山城・大和・河内・紀伊・播磨を行動圏におさめて。

このような集いを何か形あるものに、会として結成してみようとしたのは、山口先生が教壇から去られ、直接教を受けたメンバーも卒業してしまつた頃であつた。

昭和三十七年十二月、山口先生の命名になる「山麓会」が誕生した。一人一人の抱つて立つ所は山麓のさまざまな位置にある。けれども皆は一つの頂上をめざす。学生あり、すでに就職して社会の中堅たらんとするものあり。

年に二、三回の例会と、年頭の新年会がメンバーの揃うときである。

結成以来めぐつた主な所をあげてみる。まず大和路は、山辺の道に沿つて、天理市の石上神宮から、いくつかの巨大な古墳を左右に見つ、長岳寺に寄り、大三輪神社に至る。京都の東、山科では、勸修寺から随心院・醍醐寺そして日野の法界寺に。京都市の南縁、泉涌寺・東福寺・東寺・西本願寺。近江には

いつて湖東の常楽寺(西寺)、長寿寺(東寺)、善水寺。一日は洛西妙心寺に遊び、塔頭をめぐる。徳雲院・靈雲院・本堂・開山堂・桂春院・天球院・春光院・退蔵院と。紀州に遠出しては、道成寺・浄妙寺に。山城の南端、海住山寺・恭仁京跡にも。雨中を名神で近江の金剛輪寺・西明寺へ。

就職して社会人となった者も多く、全員の揃うことも不可能となつてきている。しかし常に心を通わせて、ともに育てていこうとしている会である。

在校生諸君あるいはOBの諸兄の中で志を同じくされる方はどしどし参加して下さい。大いに歓迎いたします。申し込み・問い合わせは、芦屋市山芦屋町六。山口格太郎先生まで。……(コマーシャルがすぎましたかな?)

剣友会

数年振りで戦後第五回甲陽中学校剣友会を懐しい母校で七月十七日(日曜日)午前十一時より中島久先生のお骨折りで開催。

戦前中等学校剣道界に甲陽中剣道部の勇名を轟かせた面々も幼い面影をわずかに残すのみで名乗り合えば臍白の中学時代に話の花が咲く。

戦に勝ち残って電灯の下で最後の力をしぼつての準決勝戦、惜敗の事。やっとならした優勝の喜び。

翌年優勝カップ返還のため学校の許可なく出場してお目玉を頂戴したと云う信じられぬ様な昔語り。

ピールの廻るにつれてあれやこれやと話ははずみ、思い出は尽きず。

道場は戦火のために焼失し剣豪共の夢の跡は食堂となり発育盛り高校生エネルギー補給の場となつているのも時代の流れかと!! 剣道も隆盛となり高校大会も盛大に行なわ

れている現在、母校の名の無いのに、一抹の淋しさを感じるのは小生のみだろうか? 尽きぬ名残りを借しみつつ次回を約し、今は亡き渡辺先生、横井先生、戦場の露と消え、或は病魔に斃れたる剣友の冥福を祈りつつ戦前戦後生き抜いて来た我々が仮令戦後母校に剣道部はなくても元氣な顔を合せる喜びを楽しみに三時頃散会す。



尚当日出席者次の如し。

- 内の数字は卒業回数、
- 部長吉田先生、⑥大黒二男、藤高六助
- ⑦中島清之助 ⑩浜野正男 ⑩伊東健治、香川登
- ⑩朝倉元三郎 ⑩山川重克(旧姓伊東)
- ⑩河内忠雄 ⑩赤沢隆、釜本安敏(旧姓大沢)
- 丸山橋一郎 ⑩小野俊吉、田和吉郎 ⑩中島久 ⑩川上文夫、井上寿良、西尾勉、大内隆
- ⑩宮本幸次郎、大村尚郎(以上二十二名)
- 尚名簿整備のため消息御存知の方は神戸市葺合区陽浜町二丁目一〇朝倉元三郎まで御一報下さい。

△朝倉記△

△関学甲陽会△

わたくし達の関学甲陽会は、その名の示す如く、関西学院大学に在籍する甲陽学院高等学校卒業生によって構成されるものです。昨今、大学のあり方について社会ではいろいろ議論され、諸改善の必要性が強く叫ばれていますが、わたくし達の属する関西学院大学も、御多分に洩れず漸次拡大の方向を辿り、所謂「マスプロ教育の危機」に直面しています。

その結果として、教授陣に学生は言うに及ばず、学生と学生間の関係さえも、ますます疎遠になって行く傾向にあり、学生達は自己を失い勝ちになって、本来の目的であるべき真の研究を等閑にして、ただ卒業のための単位計算に懸念しているのが一般的傾向であります。そういった状況のもとで、わたくし達、甲陽高校卒業生は、このようなことに、また学生各自が孤独感に捕われたりしないように、先輩・後輩間の親睦を増すことを目的として、「新入生歓迎コンパ」や「四年生追いつけコンパ」などと銘打って、年に二回程度、会合を持つことにしています。

幸いにして、毎回和やかな雰囲気のもとに、愉快な、有意義な時間が過ぎ、会を担当する幹事達は意を強くしています。また不慮でも、大学キャンパスで互に顔を合わせれば、各人意気投合して、いろいろ語り合う光景がしばしば見受けられます。

ところで、最近の甲陽高校の大学入試結果は、わたくし達の目を見張らせる程で喜ばしい限りですが、わたくし達、関学大に入学生は、最近では、大部分と言つてよい程、敢えなく各人の志望校の入試に破れ、意気落胆して大学生活を迎えるのです。そのため、このような後輩諸君を、苦しみを克服した先輩達が少しも慰め、励ます意味からも、関学甲陽会の存在は、わたくし達にとって年々

重要なものとなってきています。

さて関学甲陽会の活動は、「新入生歓迎コンパ」を以て開始され、先輩・後輩の最初の「面合せ」が行われます。昭和四十一年度の歓迎コンパは六月十一日の夜、大阪ニュー・ミュンヘン北大使館でされました。多数の者参加のもと、時の経つのも忘れ、和やかに散会となりました。例年このコンパが終了し長い夏期休暇が明け、前期の定期試験が近づくと頃になれば、意気消沈していたはずの新入生諸君に本来の明るさが戻り始めます。皮肉なこと、今度は、四年生の学生諸君の方が顔色を失っている光景が、しばしば見受けられることがあります。というのは夏期休暇の始まる頃から彼等は就職問題に頭を悩ますからです。このような経過を経て、秋も深まると、関学大体育会の主催する野球大会には、「バイキングス」の名のもと甲陽卒業有志が結束して覇権を目指します。昭和四十年は準々決勝で惜敗しましたが、過去には連続優勝の記録を保持しています。年が明け学年末試験の頃になれば、歯のこぼれたノートを埋めたり、必要な参考書集めをすることに、各人は相互扶助を行います。そのため数年前の逸品なら、発行元が如何なる先輩であるかも知れず丁重に取扱われることがあります。そして「四年生追いつけコンパ」が開かれ、各人は静かに、その一年を振り返るのです。ここに関学甲陽会の一年は終了するのです。

関学甲陽会の一員として自信をもって断言できることは、甲陽卒業の関学大生が和氣霽々、明るい雰囲気の中で勉強・クラブ活動に励んでいることである。甲陽出身の先輩方が各界で活躍されておられることに、わたくし達は勇気づけられておりますが、そういった方々に恥じぬだけの能力・実力を身につける事をわたくし達は願っています。

わたくし達の母校・甲陽学院高等学校が近

創立五十周年を迎えられるに当り、今後ますます発展され、良き人材を世に送り出されることを祈って、関学甲陽会の御紹介を終りたいと存じます。

△本年六月十一日開催のコンパ出席者▽

(経) 岡田三彦・田中寿一・中野洋三・藤好修二・高谷照夫・大内一晃・三浦正秋

(商) 辻貴美敏・梅村幸彦・松谷博普

(法) 白井泰弘・前川昌夫・榎原寿彦

(理) 山本史郎・小西弘・越智隆
森田幸和・宮本光晴
(学校) 中島久先生 (松谷記)

京大甲陽会

かつて昭和三十一年五月二日付の莎草(かやつりぐさ)に当時経済学部の中村佳夫氏が「京大甲陽会のこと」と題する一文を寄せておられる。当時は三十四名。ピクニックとコンパが行事。また先輩の若林(教養)、戦内(人文研)、豊田(工)、平(工)の諸先生との交流も盛んであったようである。

現在、当京大甲陽会は、毎年入学者の順調な増加と共に、学部だけでも一七〇〇八〇名の会員を擁する大世帯であり、大学院生等の正確な人数は不明であるが、これらを加えれば相当な数に上っているものと思われる。甲陽という学校で同じ釜の飯を食った人間(△)がよくもまあこんなにいるのかと驚きながらも、何となく心強く思われる次第である。多くがさまざまな運動部や文化サークルで中学、高校の生活では思いも及ばぬような活動をしており、一々あげることもできぬほどである。甲陽会としては本年度も五月に恒例の新入生歓迎コンパを行なったが、出席予定者の六割たらずの二十三名という淋しいコンパであった。

ただ甲陽会が、入試速報、新入生歓迎、卒

業生追出コンパくらいの行事しか行なっていないのは、幹事として何かもの足りなさを感じる。甲陽という一つの学校で育った人間がいれば、いい意味の甲陽精神を具体的に發揮する場が必要だと思ふ。いま四、五年の学年差があれば、どうしても、上にどのような先輩がおられるか、また下にどのような後輩がいるのか、一部を除いて全く不明の状態にある。これを打破する一つの方針として、まず甲陽出身者の正確な名簿・学部学生のみならず、大学院生、研究者、教官等も含めた一を作りたいたいと考えている。いつでも簡単に同じ専攻、研究室の先輩・後輩と交流できるようにしたい。そのことによって、現在の大学で失われがちな人間関係をつくり、勉強、スポーツ、サークル活動にも何らかの貢献でもできれば、せめてもの幹事の幸いとならう。これからの仕事に、せひとも、かよわき幹事をお助け下さることを願う次第である。(木谷記)

県庁甲陽会

高寺 保美

県庁在職の同窓会が、約四十名、毎年、春秋の好季節に甲陽会を開き、中学時代の思い出に耽り、将来のヴィジョンを語り合せて親睦を図っている。たとえ共に机を並べて学問に励み、あの広い運動場を我が物顔に走った仲ばかりではないにせよ、甲陽と聞いただけで、直ちに胸襟を開いて語り合えるのは何と

言っても同窓のよしみであろう。母校も来年は五十周年を迎えるとのことであるが、尚一層の発展を祈る次第である。

—— 県会議員 ——

別当以来の逸材

—— パ・リーグで活躍の北川 ——



別当を輩出して以来、はじめて、甲陽出身のプロ野球選手となった北川の活躍ぶりがよく注目を集めつつある。北川は甲陽高校時代から早くも県下屈指の好投手として鳴らし、高二の時には、甲陽を準々決勝に進出させる原動力となったが、報徳に1-0で惜敗している。その後、慶応義塾大学に進んで外野手に転身、三十七年秋、三十八年春の慶応優勝のシーズンにはレギュラーで五番を打ち、打率3割1厘をマーク。東京六大学野球のベストナインに選ばれた。三十九年に近鉄バファローに外野手として入

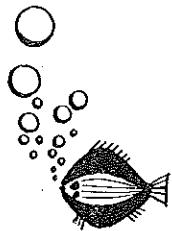
去る七月四日の対阪急十四回戦でパ・リーグ今季2本目の逆転満塁ホームランを放ったことだろう。九回、米田が投げた初球のカイブ(本人の談話ではスライダ)を狙い打ちして右翼席へ打ち込んだものだが「本塁上でナインに会ってモミクチャ」という当日の新聞記事や岩本監督の談話が、いま北川が近鉄に占めつつある比重を象徴しているようだ。現在近鉄沿線の野球ポスターには必ず北川が顔を出している。本人はおとなしく、テレビ屋な性格だが、その素質は既に実証済みだけに、なお、力をつける余地は十分にあると言えよう。

△付記▽

なお、北川選手より三年後輩であり、現在東大野球部のシヨートとして活躍中の中野忠夫君は、来年四月卒業の予定であるが、住友金属に内定。今後、ノンプロでの活躍が期待されている。

また、中野君と甲陽で同期であり、しばしば神宮球場で相見えた慶応・応援団のリーダーであった川淵秀夫君も住友電工に決定した。

団、その豊富なキャリアから言って当然、ルーキーとしての活躍を期待されたが、やや不運も手伝って、実力を発揮し切れぬきらいがあった。しかし、苦節三年目の今シーズン、対西鉄3回戦で、延長十回、若生からプロ入り第1号、しかも決勝のホームランを奪って以来、メキメキ面目を發揮し始めた。八月二日現在、打率2割6分4厘、本塁打4本をマークしている。さるオールスター戦のファン投票で、一万票の票を獲得したのも、万人のうなづけるところ。特にスクラップすべきは



50周年記念事業

<同窓会会員名簿>

昭和42年5月刊行予定

名簿編集委員

母校は50周年記念事業の一環として、会員名簿の作成に目下鋭意努力中ですが、内容を正確かつ充実を期するために、このたび各期より数名の名簿作成委員を選出いたしました。現在、各委員の方々は酷暑のさ中にも拘らず同窓諸兄の近況をとりまとめていただいておりますので、会員諸兄におかれましては、どうぞ積極的な御協力をひとえにお願いいたします次第です。なお広告掲載につきましても御協賛のほど併せてお願い申し上げます。出版は来年5月の予定です。

卒業回数	卒業年次	合永妻	田井鹿	孝次一	治郎男	宮立後	綺花藤	武達銳	男蔵馬	辺谷井	順一鳳	伊金川	東谷延	榮雄一	播西上	磨郷念	光雄次	春享郎
1	大正11年	山野井	井	三善	清一郎	諸矢大	戸島山	純彦	純彦	根沢野	三良	山荒藤	崎木高	夫保助	西小	尾池口	茂太郎	
2	大正12年	原渡	辺村	善説	一郎	大金和	山沢田	幸亮一	三雄	野村野	良二	中薄田	島田中	桂薫三	川名岡	合田田	一雄弘	
3	大正13年	日石高	下井寺	秀康	次郎	辰野中	田沢田	徳一助	一助	野上谷	三男	田荒松	中木井	嘉治郎	岡白矢	田川張	一男雄	
4	大正14年	菊永渡	池吉	保典	美雄	伊中須	野田草	清之助	信二	井界河	男平	石船永	井木井	慎一郎	白橋井	本島田	一敏	
5	大正15年	高垣	雄二															
6	昭和2年																	
7	昭和3年																	
8	昭和4年																	
9	昭和5年																	
10	昭和6年																	
11	昭和7年																	
12	昭和8年																	
13	昭和9年																	
14	昭和10年																	
15	昭和11年																	

卒業回数	卒業年次	椏	桃	梅	季	橘
16	12年	網谷一	前田治	前橋慶	昌弘	
17	13年	樽井幾	田川二	宮本茂	子修	
18	14年	山橋本	川儀一	本地潔	谷隆	
19	15年	橋野田	田幸男	山崎昇	間一	
20	16年	佐本敏	木竹平	柳原博	谷彰	
21	17年	長村卓	野治久	紅野莊	南和	北正
22	18年	塩田公	島久仁	本野仁	前陽	濱章
23	19年	西尾勉	山本雄	吉井大	村保	道秀
24	20年	小山林	新海敏		口馨	塚本
25	20年	山正保	植田宗		野一	宮本

27 昭和22年 河野隆 土谷竜 一夫 木村晃 黒川省 吾 井坂嘉 昭
 28 昭和23年 野田康 津路尾 安正 清余 武 昭
 昭和25年 近藤信 高尾 敏

卒業年次	A	B	C	D
昭26年	佐池	川山	西杉	宮内
27	藤上	口本	年森	哲郎
28	安地	小雅	太田	
29	吉元	佐彦	大森	
30	松正	男成	松野	
31	吉井	男治	下野	
32	上原	彦弘	岡井	
33	河内	男宏	村田	
34	内本	男繁	田谷	
35	橋本	朗徹	谷下	
36	官崎	一郎	路智	
37	洪朝	一真	西藤	
38	朝子	敏尚		鈴木
39	橋本			研一
40	伊吹			雄
41	部			

